島根大学教育学部紀要（人文社会科学）第14巻　57～74頁　昭和55年

障害児をもつ母親の心的ストレスに関する研究(Ⅱ)

小椋たみ子・西　信高・稲浪正充*

Tamiko OGURA, Nobutaka NISHI, and Masamitsu INANAMI

An Investigation of the Stress of the Mothers with Handicapped Children (II)

Abstracts : We investigated the item analysis of QRS which Holroyd had developed since 1973. Data used for our analysis were 236 QRSs which were answered by 28 mothers of autism, 33 mothers of blind, 67 mothers of cripple and 108 mothers of mental retardation. Ages of children of 4 : 6−12 : 11 were 122, and 13 : 0−19 : 10 were 114. Ages of mothers 25 : 0−39 : 11 were 105, and 40 : 0−60 : 0 were 131.

We calculated corrected item-total correlations in 206 items. Correlations above .50 were only 71 items.

Secondly We factor analysed items in each scale by means of principal component method. The first factor extracted accounted for low proportions of the total variance in each scale.

Thirdly we factor analysed items separately in three categories. In Parent problems we extracted five factors——Mother's Affliction, Pessimism about Child Development, Overprotection/ Dependancy, Anxiety for the Future of Handicapped child, and Social Isolation. In Family problems we extracted three factors——Burden for the Member of the Family, Financial Problems, and Lack of Family Integration. In Child problems we extracted three factors——Intellectual Incapacitation, Physical Incapacitation, and Need for the Care of the Child.

These results showed QRS did not consist of 15 scales Holroyd had assumed.

We preceeded to investigate from the result of our factor analysis. We calculated the factor scores for each case in eleven factors. The main results were as follows. The mothers with high factor scores in Child problems showed the high factor scores in Parent problems and Family problems. The mothers of autism reported more problems than other groups. The second stressful mothers were cripple. The mothres of blind were the least stressful of four groups. The mothers with institutionalized mentally retarded children reported greater stress than the mother with noninstitutionalized.

We believe these results gave us the basic and many informations to understand the psychic stress of the mother and the family with handicapped child.

問　　題

我々は，Holroyd (1973) が開発した Questionnaire on Resources and stress (QRS) を用いて島根県下の障害児をもつ母親の心的ストレスについて研究してきた（稲浪ら，1978, 1979, 1980 ; Kodaki & Inanami, 1978)。自閉症児，精神薄弱児，肢体不自由児，視覚障害児の母親の心的ストレスの特徴，及び Holroyd からのデータによるアメリカと日本の自閉症児，精神薄弱児の母親の心的ストレスの違いをみてきた。

Holroyd の QRS は206項目あり，15の下位尺度で構成されている。15尺度は，親自身の問題，家族の問題，子どもの問題の3部門に区分されている。親自身の問題は，(1) 心身不健康（11項目）(2) 時間のかかりすぎ（14項目）(3) 子どもへの拒否的態度（23項目）(4) 過保護／依存（13項目）(5) 社会援助の不足（10項目）(6) かかわりすぎ（7項目）(7) 悲観主義（13項目）の7つの尺度の91項目で成りたっている。家族の問題は，(8) 家族統合の欠如(23項目) (9) 家族の幸運制限 (10) 経済問題（17項目）の3つの尺度の49項目で成りたっている。子どもの問題は，(11)身体能力の障害（14項目）(12) 活動性の欠如（6項目）(13) 職業制限（7項目）(14) 社会の圧迫（7項目）(15) 人格上の問題（32項目）の5つの尺度の66項目で成りたっている。

Holroyd は障害児・者に対しいろいろな経験をもった親，教師，ソーシャルワーカー，精神科医，心理学者

* 島根大学教育学部障害児研究室

から，慢性的な病気を看護している家族や，ハンディキャップをもった家族メンバーに関係ある556項目をあつめた。そしてそれらを以下の16尺度に分類した――回答者の健康，回答者の個人的自由，ケースに対する回答者の態度，個人的かかわりすぎ，楽観主義―悲観主義，ケースの身体的な依存，ケースの心理的依存，スーパービジョンの必要，ケースの社会的圧迫，ケースの個人的特性，回答者に用いられる情緒的なサポート，ケースへの家族の態度，家族の活動と結合／不和，家族のメンバーの自由，ケースへの活動の促進，社会的資源と財源――。12人の心理学者，ソーシャルワーカー，病人，老人のホームケアをしている保健婦が内容，形式の適切さを考慮し，251項目を選んだ。また理論的，経験的に重要であると考えられる19項目，ストレスを誇張した15項目をくわえ，285項目からなる18尺度を構成した。ソーシャルワーカーが，質問紙に回答した6人の親にくわしい面接を行い，不適切な項目の検討を行ったが，4項目だけが，表現上の変更がなされただけだった。43人の親について18の尺度上で項目間の相関マトリックスが作成され r＝.30 以上の項目が選ばれ15尺度に減じられ，206項目が最終的な QRS を構成した。

われわれは，Holroyd の設定した15尺度にもとづいて，研究をすすめてきた。翻訳の問題もあり，また QRS を検討すると，同じような内容をあらわす項目が，別々の尺度に含まれていたりする。そこで因子分析の手法により，日本語に翻訳した日本版への反応から QRS の検討を行い，この結果に基づいて，我々の研究をすすめていく。

(1) Holroyd の設定した15尺度について，項目とその項目を除いた尺度得点との相関係数，及び折半法により，内的整合性信頼性を検討する。また，尺度ごとに因子分析し，各尺度が単一の因子で構成されているか検討する。

(2) 206項目について，親の問題，家族の問題，子どもの問題の3つの下位カテゴリー別に因子分析し，QRS を構成する因子を抽出する。

(3) (2)で抽出された因子にもとづき，母親の心的ストレスに及ぼす，子ども側の要因，母親側の要因を検討する。

方　　法

〔調査方法〕

調査対象　松江市，出雲市，隠岐とその周辺の特殊学級の小学校，中学校及び養護学校に在学する生徒の母親。[注1] 内訳は表1の通りである。障害の分類は，子どもが通学する学校が対象としている障害内容によった。

調査実施時期及び方法　昭和52年12月～53年11月に学校長，及び担当教師に主に郵送で依頼し，QRS への保護者の回答を求めた。保護者からの回答は，担任によりあつめられ，郵送により回収された。なお自閉症児に関しては昭和53年8月の療育キャンプ時に，事前に親に手渡され，回収したデータを含んでいる。

質問項目　表5，表7，表9 に示す206項目をよんで，あてはまる場合に「はい」，あてはまらない場合に「いいえ」に○をつける。答がぴったり当てはまらない時はどちらか近い方に○をつけるように依頼した。

〔データの処理〕

236名のデータを分析の対象とした。このうち110名のデータは206項目すべてへの回答がなされていた。残り126名のデータは1～21の無回答があったが，コンピュータ[注2]が自動的に欠損値として処理した。22以上無回答のあったデータ，記入者不明，父親記入のデータは，あらかじめ除いてある。

「はい」の回答を2点，「いいえ」の回答を1点として処理した。逆スケールは「はい」が1点，「いいえ」が2点である。

結　　果

(I) Holroyd の設定した15尺度の検討

1．尺度の内的整合性信頼性

表1　サンプルの内訳

グループ	人数	母親			子ども				
		年令幅（才）	平均（才）	教育期間（年）	平均（年）	年令幅（才）	平均（才）	男（人）	女（人）
自閉症	28	31～46	37.9	9～16	12.1	4.6～15.0	9.5	20	8
視覚障害	33	25～60	41.1	6～16	10.3	8.2～18.9	14.1	14	19
肢体不自由	67	30～53	40.3	8～16	10.3	6.9～19.9	13.1	34	33
精神薄弱	108	29～57	40.3	6～16	10.3	6.0～17.8	11.4	60	48

*注1 自閉症児に関しては，療育キャンプの際のデータを含めたので就学前児が1名含まれている。肢体不自由児，視覚障害児は高等部のデータを含んでいる。

*注2 本研究の計算処理は島根大学計算機センター（M140），京都大学大型計算機センター（M200）を利用した。

表2　各項目とその項目を除いた尺度得点との相関係数

No.	$r_{p.bis.}$	No.	$r_{p.bis.}$	No.	$r_{p.bis.}$	No.	$r_{p.bis.}$	No.	$r_{p.bis.}$
1	.436	43	.318	83	.259	124	.163	165	.204
2	.441	44	.220	84	−.407	125	.123	166	−.069
3	.336	45	.167	85	.342	126	.316	167	.031
4	.417	46	−.036	86	.162	127	.212		
5	.462	47	.560	87	.246	128	.344	168	.014
6	.507	48	.262	88	−.242	129	.088	169	.112
7	.244			89	.085	130	.346	170	−.013
8	.354	49	.384	90	.185	131	.144	171	.108
9	.388	50	.244	91	.353	132	.368	172	−.059
10	.363	51	.273			133	.174	173	−.013
11	.510	52	.225	92	.178	134	.225	174	.045
		53	.408	93	−.033	135	.330		
12	.161	54	.357	94	.191	136	.203	175	.352
13	.422	55	.251	95	.228	137	.336	176	.470
14	−.140	56	.163	96	−.300	138	.307	177	.227
15	.437	57	.233	97	.211	139	.302	178	.480
16	.275	58	.034	98	.251	140	.249	179	.396
17	.294	59	.030	99	.203			180	.237
18	.186	60	−.089	100	.218	141	.187	181	.622
19	.342	61	.049	101	.279	142	.425	182	.686
20	.414			102	.184	143	.065	183	.538
21	.312	62	.104	103	.011	144	.212	184	.576
22	.574	63	.111	104	.118	145	.139	185	.135
23	.411	64	.212	105	.380	146	.152	186	.443
24	.351	65	.121	106	−.073	147	.064	187	.175
25	.205	66	−.179	107	.190	148	.367	188	.242
		67	.100	108	.197	149	.104	189	.370
26	.258	68	−.052	109	.208	150	.418	190	.286
27	.367	69	.128	110	.188	151	.502	191	.328
28	.283	70	−.105	111	.229	152	.517	192	.353
29	.367	71	.101	112	.038	153	.471	193	.579
30	.129			113	.128	154	.541	194	.172
31	.123	72	.074	114	.245			195	.427
32	.393	73	.084			155	.252	196	.535
33	.283	74	.312	115	.135	156	.070	197	.300
34	.454	75	−.080	116	.340	157	.342	198	.542
35	.366	76	.266	117	.261	158	.088	199	.397
36	.498	77	.095	118	.253	159	.066	200	.087
37	.513	78	.300	119	.052	160	.121	201	.017
38	.343			120	.047			202	.208
39	.543	79	.279	121	.297	161	.138	203	.141
40	.280	80	.289	122	.165	162	.003	204	.584
41	−.093	81	.304	123	.083	163	.207	205	.456
42	.339	82	.326			164	.029	206	.135

表3　信頼性係数（折半法による）

尺　度	r_{SB}
尺　度　1	.702
尺　度　2	.708
尺　度　3	.777
尺　度　4	.279
尺　度　5	.243
尺　度　6	.368
尺　度　7	.458
尺　度　8	.455
尺　度　9	.490
尺　度　10	.647
尺　度　11	.541
尺　度　12	.405
尺　度　13	.264
尺　度　14	.067
尺　度　15	.838

表4　第1因子第2因子への寄与率（%）

尺度＼寄与率	第1因子	第2因子
尺　度　1	30.6	12.4
尺　度　2	23.8	10.8
尺　度　3	19.4	7.9
尺　度　4	18.5	13.9
尺　度　5	20.9	13.7
尺　度　6	26.0	18.6
尺　度　7	24.2	11.6
尺　度　8	12.7	7.5
尺　度　9	20.1	14.1
尺　度　10	17.1	9.6
尺　度　11	24.2	10.0
尺　度　12	25.3	17.8
尺　度　13	23.3	16.5
尺　度　14	21.5	17.2
尺　度　15	22.4	6.5

206項目について各項目と，その項目を除いた尺度得点との相関係数を求め，表2に示した。.50以上の値を示す項目は，尺度1で11項目中2項目，尺度2で14項目中1項目，尺度3で23項目中3項目，尺度11で14項目中3項目，尺度15は32項目中8項目であった。のこりの尺度は.50以上を示す項目は1つもなかった。尺度得点と相関の高い項目は非常に少いことがわかる。

各尺度について，折半法により，Spearman-Brown の公式により，信頼性係数を求め，表3に示した。尺度1，2，3，10，15はかなり高い信頼性係数が得られたが，他の尺度は低い。

2．因子分析

各尺度ごとに，項目間の相関行列を算出し，これに基づいて主因子法因子分析を行い，2因子抽出した。

各尺度における第1因子と第2因子の寄与率を表4に示した。各尺度で第1因子で説明できるのは，全体の分散の12.7%（尺度7）から30.6%（尺度1）にすぎない。各尺度とも Holroyd が設定したような単一の因子で構成されていないことがあきらかである。

(II) 新尺度の構成

206項目全部を一緒に因子分析することが我々の利用したコンピュータではできなかったので，Holroyd が区分した尺度1から尺度7までの親の問題の91項目，尺度8から尺度10までの家族の問題の49項目，尺度11から尺度15までの子どもの問題の66項目の3つのカテゴリーごとに因子分析した。

1．親の問題

第1から第91項目への220ないし236ケースの反応をもとに91項目間の相関行列を算出し，これに基づいて主因子法因子分析を行った。3～7因子と因子数をかえながらバリマックス回転し，最も解釈が可能であった5因子を抽出した。この5因子により全分散の27.9%が説明された。この結果を表5に示した。

5因子への共通性が0.15以下の22項目を除き，69項目についてあらたに主因子法因子分析を行い5因子抽出し，それについてバリマックス回転した。これら5因子により全分散の33.4%が説明された。この結果を表6に示した。この結果から，因子負荷量が0.40以上の項目をもとに因子の検討をこころみた。

第1因子に高く負荷する項目は，（11.[注3] 私はしょっちゅう悩んでいます），（17．私はときどき家をしばらく離れたくなることがあります），（2．私は自分の人生のなりゆきに心を乱されます），（4．もし私がもっと健康だとしたら，——[注4]の世話をみるのはもっと容易でしょうに），（22．もし——が居なければ，対外活動も楽にできるのですが），（20．——の養育に手が離せないため，私自身の成長と発育が制限されます）等の項目で全分散の18.0%がこの因子で説明された。Holroyd の設定した尺度1（心身不健康），尺度2（時間のかかりすぎ）の項目が含まれている。我々はこの第I因子を，精神的苦悩（P1）と名づけた。

第II因子は，（58.そのうちには——も自分でもっとできるようになるでしょう，F）[注5]，（85．月日がたつにつれ——の世話にますます手がかかるようになると思います），（81.——は今後ますます私の時間をとるようになると思います），（91.——はこれ以上よくなれません）の項目である。全分散の4.7%が第II因子で説明された。Holroyd の尺度7（悲観主義）の項目が多く含まれている。子どもの将来に期待できない意味を含む項目である。我々もこの因子を悲観主義（P2）と命名した。

第III因子は，（28.——は障害にもかかわらず，自分の能力をとてもよく発揮しています，F），（53.——は自分でできるはずのことをできるだけやってみようとはしません），（57.——は自分で物事をしたがります，F）の項目で，全分散の4.2%がこの因子で説明された。Holroyd の尺度4（過保護／依存）の項目が含まれている。子どもが自分で物事をしないために親の世話が必要である意味を含む項目である。我々はこの第III因子を過保護／依存（P3）の因子と名づけた。

第IV因子は，（1．将来を考えると悲しくなります），（36．——がいつまでたってもこんな風だと思うとやり切れません），（78.私は，いずれ——の世話ができなくなったとき，どうなることやらと心配ばかりしています），（5．——のことを思うと悲しくなります），（47.——は，いつも私達の頭痛の種です），（74.私は——の面倒が見られなくなった時のことが心配です）の項目であり，全分散の3.4%が説明された。Holroyd の尺度3（子どもへの拒否的態度），尺度6（かかわりすぎ），尺度1の項目が含まれていた。子どもの将来への心配をあらわしている項目であり，我々はこの因子を将来への不安（P4）の因子と名づけた。

第V因子は，（66．親しい友人達と問題を語り合うだけで人生が気楽になります，F），（68．友人の中には——に出会って大変力になってくれるものがいます，F），（48.私は他人から——の様子を聞かれたとき，気まりの悪い思いをしたりはしません，F），（41.——を世話することで，人間尊重の心が生じました，F）の項目で，全分散の3.2%がこの因子で説明された。Holroyd の尺度5（社会援助の不足），尺度3（子どもへの拒否的態度）の項目が含まれている。我々はこの因子を社会的孤立（P5）の因子と命名した。

*注3 項目番号をあらわす。
*注4 ——には子どもの名前が入る。
*注5（F）のついた項目は評定方向が逆になる。

表5　親の問題のバリマックス回転後の因子負荷量

No.	項　目	I	II	III	IV	V	h^2
1	将来を考えると悲しくなります	.129	.621	.083	.110	.148	.443
2	私は自分の人生のなりゆきに心を乱されます	.512	.311	−.027	.104	.065	.375
3	私はくたびれはてて、楽しむ気持にもなれません	.415	.073	−.023	.307	−.034	.274
4	もし私がもっと健康だと――の世話をみるのはもっと容易でしょうに	.524	.096	.215	.248	−.008	.392
5	――のことを思うと悲しくなります	.162	.562	.083	.155	.172	.403
6	――の養育は私にとって重荷です	.306	.375	.022	.334	.135	.365
7	時々私は――が言いだすことを忘れてしまいたくなることがあります	.361	.072	−.019	.097	.184	.179
8	私は昔も今も健康です（F）	.394	.008	.038	.181	−.110	.202
9	私はあまりくよくよしません（F）	.299	.337	−.080	.067	−.044	.216
10	私はめったに気が滅入ったりしません（F）	.305	.280	−.150	−.002	−.129	.211
11	私はしょっちゅう悩んでいます	.522	.277	−.053	.163	−.002	.379
12	――が他人に暴力をふるったり、自分を傷つけたりしないように私は常に見守っております	.167	.115	.284	.013	.106	.134
13	――の調子がよくない時には、私は外出もできません	.167	.361	.157	.291	.262	.337
14	私は少くとも週一回は気晴らしに外出します（F）	−.299	.085	−.136	.011	−.023	.116
15	――の世話のため、私は自分が一番望んでいたことをあきらめました	.422	.241	.031	−.021	.207	.281
16	私は気が向けば何時でも友人の宅を訪ねて行けます（F）	.207	.103	−.238	.143	.122	.146
17	私はときどき家をしばらく離れたくなることがあります	.574	.035	−.097	.065	.074	.350
18	私はその子以外の家族に手をかす時間がとれません	.212	.040	.010	.273	.035	.123
19	私は自分の時間を十分もっています（F）	.331	.112	−.087	.179	.078	.168
20	――の養育に手が離せないため、私自身の成長と発育が制限されます	.485	.033	−.062	.172	.231	.324
21	――の故で私は就職をあきらめる他ありませんでした	.318	.098	.114	.005	.249	.186
22	もし――が居なければ対外活動も楽にできるのですが	.496	.211	.039	.266	.315	.463
23	――の世話の大部分は私にふりかかってきます	.247	.107	.237	.040	.262	.199
24	私は気晴らしに外出することができます（F）	.340	.166	−.031	.143	.026	.165
25	――の要求が万事に優先します	.052	.092	.259	.132	.149	.119
26	他人は――をあからさまにじろじろ見たりはしないのですが、心の中でどう思って見ているのか気にかかります	.148	.386	−.028	.006	−.035	.173
27	――には、変な習慣が目につきます	.377	.229	−.148	−.059	.197	.259
28	――は障害にもかかわらず、自分の能力をとてもよく発揮しています（F）	.029	.131	−.222	−.050	.539	.361
29	もし――がもっと機嫌がよければ、世話するのも楽でしょうに	.310	.229	.220	.180	.207	.273
30	しょっちゅう――が死ぬことを考えています	−.067	.040	.078	.147	.334	.146
31	かりに――が死ぬとわかったとしても、私はあまり悩まないと思います	.065	.016	−.019	.083	.236	.067
32	――は活動が制限されるので、自分の力で伸びられないと思います	.185	.202	−.080	.211	.305	.220
33	私は――にむずかし過ぎることをやらさないよう非常に気を使っています	.271	.138	.234	−.000	.202	.188
34	私は――を人眼にさらすことを避けることがあります	.281	.378	−.126	.075	.084	.251
35	――に自力でやらせて台無しにさせるよりも、私がやってる方が気楽です	.246	.198	.125	.151	.210	.183
36	――がいつまでたってもこんな風だと思うとやりきれません	.243	.605	.146	.097	.157	.481
37	私は――を人前に連れ出す度に緊張します	.274	.457	−.023	.221	.032	.335
38	――と一緒に暮らすのは楽です（F）	.194	.292	−.148	.373	.117	.298
39	――のためにほとほと困りはてることがあります	.444	.379	−.010	.206	.260	.452
40	――が何かをしようとして失敗するのを見ているのはいやです	.270	.204	.079	.107	.085	.140
41	――を世話することで、人間尊重の心が生じました（F）	−.070	−.109	−.503	.054	−.108	.285
42	――が人並みの暮しをしようとしないので私はがっかりしています	.316	.206	−.038	.085	.248	.213
43	私が心配しているのは――が年老いてからどうなるかということです	.039	.385	.223	.084	.169	.235
44	人々が――をじろじろ見ても、私は気にかけません（F）	.167	.236	−.294	−.029	.002	.171
45	――の故で、私は人々との連帯をもっと理解できるようになりました	.079	.195	.287	−.125	.083	.149
46	私は教会に楽しく通っています。または、私は宗教的な雰囲気が好きです	.244	−.226	.030	−.001	.036	.113
47	――は、いつも私達の頭痛の種です	.304	.567	−.041	.122	.204	.473
48	私は他人から――の様子を聞かれたとき、気まりの悪い思いをしたりはしません（F）	.070	.290	−.326	−.045	.038	.199
49	――が家から一歩外へ出れば、世間なみのことは何一つ出来るはずがない	.277	.431	.106	.300	.220	.413

No.	項　　目	I	II	III	IV	V	h^2
	と、ふと不安になることがあります。						
50	私は――が自力でできることでも、ついやってやる傾向があります	.078	.184	.188	−.105	.321	.190
51	――が私や他の家族にたより過ぎているようには思われません	.127	.134	−.031	.114	.216	.095
52	――は障害があるので進歩が妨げられています	.077	.339	.141	.098	.242	.209
53	――は自分でできるはずのことを、できるだけやってみようとはしません	.335	.098	−.042	.050	.439	.319
54	――が自分でできるはずのことを他人がしてやります	.298	.128	.020	.007	.249	.168
55	――は過保護です	.278	.064	.233	−.060	.200	.179
56	――はもっと自由になりたがっています	.325	.148	.102	−.032	−.133	.157
57	――は自力で物事をしたがります（F）	.122	.093	−.313	.124	.439	.330
58	そのうちには――も自分でもっとできるようになるでしょう（F）	.004	−.057	−.206	.521	.203	.358
59	私には――が家族の者より専門の看護婦、ヘルパーなどに世話してもらいたがっているように思えます	−.034	.157	.029	.141	.025	.047
60	――は自分自身のためにもっと多くのことができるはずです	.116	−.190	.211	−.352	−.105	.229
61	――のためなら、どんな骨折も平気です	.067	−.036	.290	−.057	.015	.093
62	――をどのように面倒を見たらよいか家族で話し合います	.632	.361	.369	.100	.101	.291
63	家族の中には私のやり方を好まない者もいます	.468	.055	−.020	.019	−.001	.223
64	――と一緒にいることがどんなことかわかっている人は多くいません	.253	.254	.095	.129	.217	.201
65	私の所属している団体は私が――と共に抱えている問題の解決に手助けしてくれます	−.012	.028	.400	−.014	.049	.163
66	親しい友人達と問題を語り合うだけで人生が気楽になります（F）	−.087	.005	−.523	.033	−.008	.283
67	少なくとも一年に一回は――を医者に診せます	−.078	.104	.246	.102	.021	.088
68	友人の中には――に出合って大変力になってくれるものがいます（F）	.040	.099	−.448	−.019	.129	.229
69	私達とたがいに問題を分かち合う家族のための組織があります	.109	−.039	.343	−.054	.028	.135
70	家の者は私の悩みを分かってくれます	.063	−.220	−.319	.072	−.030	.161
71	――の故で私達は多くの友人を失いました	.279	.122	−.051	−.104	.180	.139
72	私は――の扱い方を心得ているので、責任を果しているつもりです	−.053	.068	.207	.007	−.077	.056
73	――は私がただひとりの理解者だと思っているようです	.182	.056	.050	−.038	.024	.041
74	私は――の面倒が見られなくなった時のことが心配です	.139	.467	.172	.184	.117	.315
75	私にも――の世話ができることがわかって気をよくしています（F）	.057	.032	−.286	−.004	.074	.091
76	私には責任が重すぎます	.386	.347	.042	.264	.049	.344
77	――を介助していると、とてもよいことをした気になります	−.013	.123	.257	−.014	−.129	.098
78	私はいずれ――の世話ができなくなったとき、どうなることやらと心配ばかりしています	.169	.571	.163	.239	.050	.441
79	――の状態は必ずよくなると思っています（F）	−.102	.287	−.042	.307	.264	.259
80	家族状況はこれからだんだんよくなっていくと思います（F）	.135	.278	−.039	.422	−.086	.283
81	――は今後ますます私の時間をとるようになると思います	.301	.219	.090	.467	.059	.369
82	皆が家を去って――と私とふたりだけが家に残される日がくるのを恐しく思います	.190	.357	.138	.398	−.155	.366
83	私は――が特殊な場所（たとえば病院・施設など）で生活する他ないという事実を認めます	−.136	.334	.101	.330	.105	.261
84	――の状態がだんだん悪化していくのを、そっと見ているのは耐えられません（F）	−.222	−.192	−.079	−.399	−.056	.255
85	月日がたつにつれ――の世話にますます手がかかるようになると思います	.148	.096	.120	.576	.152	.401
86	――はもう長く生きられないと自分で思っているのではないかと心配です	−.053	−.064	.154	.207	.319	.176
87	――は今の状態よりも少しでも明るくなることは決してないでしょう	.125	.092	−.055	.303	.107	.130
88	――がどこか他所で暮すことになると、これまで個人的に受けていた看護や世話をしてもらえなくなるので心配です	−.194	−.181	−.237	−.131	.004	.144
89	――はどこに居るよりわが家にいた方が安泰です（F）	−.281	−.009	−.252	.170	.019	.172
90	――が年をとるにつれて扱いにくくなることが気になります	.295	.440	.042	.195	.194	.359
91	――はこれ以上よくなれません	.014	.045	−.149	.424	.034	.206

表6　親の問題のバリマックス回転後の因子負荷量
（表5より共通性が0.15以下を除く）

No. ＼ 因子	I	II	III	IV	V	h^2
1	.146	.083	.124	**.632**	.061	.448
2	**.533**	.045	.079	.296	.087	.388
3	**.448**	.258	.044	.047	−.044	.274
4	**.525**	.134	.029	.164	−.150	.344
5	.187	.125	.162	**.561**	.004	.392
6	.338	.332	.117	.383	−.056	.389
7	.332	.110	.232	.055	−.037	.181
8	**.430**	.089	−.088	.025	−.025	.202
9	.334	−.034	−.033	.311	.188	.247
10	.340	−.081	−.121	.236	.282	.272
11	**.577**	.084	.008	.244	.102	.410
13	.202	.285	.257	.372	−.102	.338
15	**.417**	−.036	.234	.210	.048	.277
17	**.565**	.022	.130	.007	.091	.345
19	.324	.168	.127	.080	.053	.159
20	**.483**	.147	.250	.022	.031	.324
21	.309	−.007	.237	.117	−.049	.168
22	**.504**	.259	.339	.202	−.004	.477
23	.220	−.007	.312	.149	−.225	.219
24	.348	.094	.112	.132	−.009	.160
26	.182	−.043	−.024	.347	.133	.174
27	.323	−.027	.285	**.167**	.195	.253
28	.052	.075	**.563**	.095	.220	.383
29	.310	.151	.217	.263	−.207	.279
32	.163	.239	.311	.193	.138	.238
33	.251	−.083	.231	.187	−.216	.205
34	.281	.046	.146	.328	.229	.263
35	.257	.053	.209	.243	−.104	.183
36	.274	.045	.171	**.604**	−.064	.477
37	.329	.170	.048	**.433**	.113	.340
38	.246	**.394**	.105	.250	.093	.299
39	**.448**	.199	.272	.357	.048	.445
41	−.057	.099	−.082	−.219	**.432**	.254
42	.289	.103	.287	.186	.036	.213
43	.024	.076	.145	**.452**	−.147	.254
44	.140	−.024	.060	.157	**.403**	.211
47	.319	.093	.224	**.533**	.160	.471
48	.033	−.001	.082	.203	**.459**	.260
49	.288	.241	.206	**.477**	−.046	.414
50	.037	−.143	.327	.227	−.140	.200
52	.079	.061	.250	.373	−.019	.212
53	.274	.073	**.477**	.095	.036	.318
54	.269	−.021	.273	.133	−.019	.165
55	.242	−.145	.223	.128	−.161	.172
56	.331	−.127	−.095	.156	−.002	.159
57	.062	.245	**.442**	.032	.263	.330
58	.043	**.547**	.123	−.051	.143	.339
60	.071	**−.391**	−.040	−.166	−.173	.218
62	.064	.040	.093	**.448**	−.293	.301
63	**.466**	−.030	.096	.008	.011	.228
64	.248	.111	.276	.259	−.118	.232
65	−.015	−.070	.022	.123	−.382	.167
66	−.080	.137	−.025	−.116	**.474**	.264
68	.009	.030	.167	.002	**.460**	.240
70	.067	.110	−.007	−.298	.262	.174
74	.142	.151	.115	**.513**	−.062	.324
76	**.423**	.221	.053	.343	−.011	.349
78	.216	.195	.026	**.602**	−.058	.452
79	−.064	.378	.165	.285	.084	.263
80	.215	.372	−.123	.278	.048	.280
81	.336	**.417**	.087	.245	−.085	.362
82	.276	.300	−.186	.396	−.040	.360
83	−.096	.282	.039	.393	−.069	.250
84	−.279	−.380	−.001	−.229	.109	.287
85	.216	**.505**	.046	.179	−.144	.357
86	−.008	.172	.187	−.000	−.191	.101
89	−.242	.251	−.023	−.064	.158	.152
90	.323	.145	.223	**.435**	.011	.366
91	.080	**.405**	−.018	.030	.139	.191

以上，親の問題について，精神的苦悩，悲観主義，過保護／依存，将来への不安，社会的孤立の5つの因子を抽出した。

2.　家族の問題

第92項目から，第140項目への217ないし236ケースの反応をもとに49項目間の相関行列を算出し，これに基づいて主因子法因子分析を行った。2～3と因子数をかえ，バリマックス回転し，最も解釈可能なる因子を抽出した。この3因子により全分散の20.5%が説明された。この結果を表7に示した。3因子への共通性が0.15以下の27項目を除き22項目についてあらたに主因子法因子分析を行い，3因子抽出し，それについてバリマックス回転した。これら3因子により全分散の35.2%が説明された。この結果を表8に示した。因子負荷量が0.40以上の項目をもとに因子の検討をこころみた。

第I因子に高く負荷している項目は，（116.――が居るので，家族は皆辛抱しなければなりません），（118.将来ますます責任と家計の負担が増加するので，私達は世間並みの暮しがしにくくなると思います），（96.――は問題や病気のため家族から取り残されます，F），（130.――の世話は私達家族にとって家計上の負担になっています）の項目で，Holroyd の家族の問題についての3つの尺度すべてに含まれている。この第I因子で全分散の17.3%が説明された。我々はこの因子を，家族への負担（F1）の因子と名づけた。

第II因子に高く負荷している項目は（132. 私達家族

表7　家族の問題のバリマックス回転後の因子負荷量

No	項　　目	I	II	III	h^2
92	家族の誰もが同じように――に気を配っています（F）	−.073	−.082	.347	.132
93	家の者が旅行に出かけ、ひとり残されてもその子は文句を言いません	−.040	.103	.065	.016
94	家の者はお互いに為し遂げたことを賞讃し合います（F）	.005	.059	.431	.189
95	私達の家では家族そろって夕食の食卓をかこみます（F）	.001	.036	.277	.078
96	――は問題や病気のため家族から取り残されます（F）	−.457	−.126	−.110	.237
97	重要なことに関しては家族の意見は一致しています（F）	.099	−.035	.301	.102
98	――は他の子と同じように、自分なりのやり方で家の者を楽しませてくれます（F）	.285	.039	.375	.224
99	家族の態度が――が一緒に住むことをもはや不可能にしています	.252	.051	.148	.088
100	――は他の家との家族ぐるみの付き合いの中に入っていけます（F）	.354	.134	.321	.246
101	家族の中のある者のために深刻な感情問題が続いています	.181	.149	.181	.088
102	親類の人達はとても力になってくれます（F）	.023	.068	.340	.121
103	家族の誰一人、酒を飲み過ぎたりしません（F）	.018	.077	.032	.007
104	――は家族と一緒に食事をします（F）	−.005	−.028	.181	.033
105	私達は――がだんだん、ひとりの人間として見えてくるようになり、楽しくなりました	.330	.076	.435	.304
106	――のために私達は転居しました	.230	−.040	−.168	.083
107	――を連れて旅行することは家族全員の楽しみの妨げになります	.306	.166	.133	.139
108	――のため家族同士の話が通じ合わなくなります	.274	.123	.111	.103
109	――を世話してきたことは私達の家庭生活を深めてくれました（F）	−.124	−.042	.377	.159
110	――のために食事ものどを通らぬ思いでした	.430	.030	.110	.197
111	――は家族に受け入れられています（F）	−.034	.040	.416	.176
112	私達は――と死について語り合ってきました	.241	−.014	−.049	.060
113	私達の家族には恨み辛みが山程あります	.243	.106	.083	.077
114	私達の家族は互いに個人的問題を気楽に話し合っています	.029	.131	.297	.106
115	――のために進学または就職をあきらめさせられたものが家族の中にいます	.210	−.116	−.008	.057
116	――が居るので、家族は皆辛抱しなければなりません	.590	.024	.077	.355
117	――の絶え間ない世話のために、他の子の成長や発達が妨げられています	.305	.102	.057	.106
118	将来ますます責任と家計の負担が増加するので、私達は世間なみの暮しがしにくくなると思います	.431	.503	.019	.440
119	――を病院や特殊学級から他へ移せなかったので、家族の中のひとりは就職の機会を逃してしまいました	.121	−.020	.017	.015
120	家族はこれまでやってきたように、今もできるだけ何でも一緒にすることにしています（F）	.065	−.088	.383	.159
121	――を加えて家族全員が楽しめる場所はいくらでもあります（F）	.271	.339	.370	.326
122	――から目が離せないため、家族の中のひとりは就職の機会を逃してしまいました	.237	.051	−.056	.062
123	私達家族は他の家族がやっていることと同じ様なことをしているまでです	.104	−.055	.165	.041
124	私達の借金を返済するのに三年以上かかるでしょう	.196	.253	−.088	.110
125	私の住宅は――に必要なものを誰もが楽に満たしてやれるように快適な配置をしています（F）	.188	.0007	.274	.110
126	家族の収入は過去5年間落ち込んでいます	.236	.420	−.094	.241
127	――のためには住宅を改造した方がよいと思います	.398	.112	−.001	.171
128	――に金がかかるので、家では皆が切りつめています	.362	.372	.042	.271
129	私達は――の世話をして下さる方に謝金を支払う用意があります（F）	−.126	.084	.139	.042
130	――の世話は私達家族にとって家計上の負担になっています	.390	.321	−.021	.256
131	私達の家族は社会扶助を受けています	.014	.247	−.001	.061
132	私達家族の収入は平均以上です（F）	−.046	.577	.054	.338
133	私達の収入の25%が――の療育費に使われています	.136	.286	−.042	.102
134	私達は多額の借金をしています	.261	.227	−.154	.143
135	私達の家族は貯金や投資を手がけてきました（F）	−.190	.511	.169	.326
136	私達は自宅を所有または買入れようとしています（F）	−.233	.342	.167	.199
137	私達はぜいたくをしようにもできません	.110	.547	−.166	.340
138	私達には収支を一致させることがほとんどできません	.179	.326	−.108	.151
139	――は自室をもっています（F）	.093	.321	.198	.151
140	家にはよい洗濯設備があります（F）	.058	.188	.302	.130

表8　家族の問題のバリマックス回転後の因子負荷量
（表7より共通性が0.15以下の項目を除く）

No. ＼ 因子	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	h^2
94	.020	.079	**.416**	.180
96	−**.482**	−.043	−.102	.245
98	.366	−.013	.362	.265
100	.389	.131	.256	.235
105	.368	.036	**.404**	.300
109	−.072	−.004	.300	.095
110	**.435**	−.043	.068	.196
111	.001	.052	**.478**	.231
116	**.555**	−.048	.071	.315
118	**.525**	.393	−.013	.430
120	.079	−.090	**.415**	.186
121	.361	.309	.378	.369
126	.246	.386	−.153	.233
127	**.421**	.067	−.121	.197
128	.399	.334	−.012	.271
130	**.467**	.238	−.066	.279
132	.048	**.577**	.007	.335
135	−.050	**.524**	.126	.293
136	−.164	**.419**	.141	.223
137	.213	**.480**	−.211	.320
138	.245	.256	−.170	.155
139	.138	.358	.122	.162

の収入は平均以上です，F)，(135.私達の家族は貯金や投資を手がけてきました，F)，(137．私達はぜいたくしようにもできません)，(136．私達は自宅を所有または買入れようとしています，F）の項目で Holroyd の尺度10（経済問題）の項目に負荷が高い。全分散の9.7%が説明された。我々もこの因子を経済問題（F２）の因子と命名した。

第Ⅲ因子は，(111.――は家族に受け入れられています，F)，(94.家の者はお互いに為し遂げたことを賞讃し合います，F)，(120．家族は，これまでやって来たように，今もできるだけ何でも一緒にすることにしています，F)，(105．私達は――がだんだん，ひとりの人間として見えてくるようになり，楽しくなりました，F）の項目に高く負荷があり，Holroyd の尺度８（家族統合の欠如)，尺度９（家族の幸運制限）の項目が含まれている。全分散の8.3%が説明された。子どもが家族の一員としてうけいれられ家族が和合していることを意味し，我々はこの因子を家族の和合の欠如（F３）と名づけた。

以上，家族の問題について，家族への負担，経済問題，家族の和合の欠如の３因子が抽出された。

3．子どもの問題

第141項目から第206項目への222から236ケースの反応をもとに66項目間の相関行列を算出し，これに基づいて，主因子法因子分析を行った。３～５因子と因子数を変えながらバリマックス回転し，最も解釈が可能であった３因子を抽出した。この３因子により全分散の24.5%が説明された。この結果を表９に示した。

３因子への共通性が0.15以下の30項目を除き，36項目について，あらたに主因子法因子分析を行い，３因子抽出し，それについてバリマックス回転した。これら３因子により全分散の38.8%が説明された。この結果を表10に示した。

第Ⅰ因子に負荷の高い項目は，(196.――は自分も１人前の人間だと思っています，F)，(182．――は他人ととてもうまくやって行けます，F)，(204．――は，人に向って自分の気持ちを表現できます，F)，(181．――は自分の住所がわかります，F)，(205.他人への思いやりは――の長所の１つです，F)，(183．――は自分が誰であるか（男か女か，何才かなどが）わかります，F)，(193．――は，自分のことを，ひとりの人間として話すことができます，F)，(184．――は自分に向っていわれていることを理解するのが困難なので，いってきかすこともなかなかできません）等である。Holroyd の尺度15（人格上の問題）に含まれる項目に負荷が高い。全分散の24.6%が説明された。我々は，第Ⅰ因子を知的能力の障害（C１）と名づけた。

第Ⅱ因子は，(153.――は介助なしで歩行できます，F)，(152．――には便器またはおしめが必要です)，(151．――はバスに乗りこむことができます，F)，(150．――はひとりで浴室まで行けます，F)，(154．――は浴室で介助が必要です）の項目に負荷が高い。Holroyd の尺度11（身体能力の障害）の項目である。全分散の8.2%が説明された。我々もこの第Ⅱ因子を身体能力の障害（C２）と名づけた。

第Ⅲ因子は，(168.――のまわりに人がいると私は気がゆるめません。いつもその子の護衛役です)，(169．――がよその子達からじろじろ見られないよう守ってやらなければと感じています)，(180．――は誰かが自分のために何かをやってくれると知ると，もう自分でやろうとはしません)，(186．――は注意を長時間集中することができません）で，Holroyd の尺度14（社会的圧迫）と尺度15の項目に負荷が高い。全分散の6.0%が説明された。社会的対人的関係での子どもの能力の障害のためにケアーする必要があるとの意味を含んでいる。我々は第Ⅲ因子を子どものケアーの必要（C３）と名づけた。

以上，子どもの問題について，知的能力の障害，身体能力の障害，子どものケアーの必要の３つの因子が抽出された。

親の問題，家族の問題，子どもの問題の３つのカテゴリー別に因子分析を行ったが，共通性の低い項目を除いても，各下位カテゴリーで説明できるのは，全分散の

表9　子どもの問題のバリマックス回転後の因子負荷量

No.	項　　目	I	II	III	h^2
141	――には決まった時間に服薬さすようにしてはありません（F）	.034	.172	.115	.044
142	――は自分で食っていくことができます（F）	.407	.320	.265	.339
143	――は痛みがひどいようです	−.077	.125	.142	.041
144	電気装置の扱い方を誤れば――の生命や健康が危険にさらされます	.131	.094	.302	.117
145	私達は外出するとき――を一緒につれていきます（F）	.076	.102	.033	.017
146	――がゲームやスポーツで遊んでいると、怪我しないかと心配になります	.052	.130	.356	.146
147	――の健康状態は悪い方には向っていません（F）	.124	.076	−.094	.030
148	――はゲームやスポーツに参加できます（F）	.544	.285	.151	.400
149	私は――が他の家族と同じようにどしどしいろいろな場所に出かけた方がよいと思います（F）	.262	.089	−.200	.117
150	――はひとりで浴室まで行けます（F）	.100	.624	−.150	.422
151	――はバスにのりこむことができます（F）	.180	.602	.072	.400
152	――には便器またはおしめが必要です	.121	.694	.086	.505
153	――は介助なしに歩行できます（F）	.002	.711	−.010	.506
154	――は浴室では介助が必要です	.182	.618	.266	.487
155	――をぼんやりさせておかないよう万事に気を配ることは大仕事です	.250	.062	.371	.204
156	――は放たらかしにされています	.131	−.109	−.026	.030
157	――は時間を持てあましています。特に自由時間がそうです	.269	−.027	.342	.190
158	――はテレビやラジオなど、いろいろ持っていて、自分の部屋で楽しんでいます（F）	.237	−.042	.006	.058
159	――の機嫌をとるのは簡単です（F）	.231	.079	.037	.061
160	――は多くのことで忙しくしています（F）	.264	.059	.073	.079
161	地域社会では――のために特に必要なものが備っています（F）	.204	.031	.133	.060
162	――のため、カウンセラーか教師に少くとも月1回は来てもらっています	−.009	.171	.167	.057
163	――が暮らしを立てていくための仕事の種類は限られています	.087	−.134	.262	.094
164	――はひるまは特殊学級か通級施設で過ごします	.109	−.113	.060	.028
165	――のことで一番気にかかるのははたして生計を立てる能力があるかということです	.064	−.079	.374	.150
166	情報や激励はその気になれば手に入ります（F）	.091	.035	−.242	.068
167	――の件のために特別の基金の援助を受けています	.077	−.086	.081	.020
168	――のまわりに人がいると私は気がゆるめません。いつもその子の護衛役です	.310	.199	.420	.312
169	――がよその子達からじろじろ見られないよう守ってやらねばと感じています	.005	.145	.467	.239
170	地域社会は――のような人のためにあるはずです（F）	−.059	−.057	−.187	.042
171	――はときどき異常に色気づくことがあります	−.042	.040	.147	.025
172	――は自分も1人前の人間だと思っています	−.652	−.160	.088	.459
173	私達家族にとって何かをするとき、見知らぬ人より知っている人と一緒の方がやりやすいです（F）	.145	−.024	−.227	.073
174	――は魅力的な清潔な容姿の持ち主です（F）	.165	−.081	−.087	.041
175	――は必要でもないのに他人の手を借りたがります	.335	.113	.240	.183
176	――は時間のたいせつさがわかっています（F）	.493	.046	.172	.274
177	――は気持ちのよい性格の子です（F）	.253	−.155	.061	.092
178	――は同じ年頃の子とは話しが通じません	.535	.055	.208	.333
179	――はたいてい、いつも扱いやすいです（F）	.449	.038	−.036	.204
180	――は誰かが自分のために何かをやってくれると知るともう自分でやろうとはしません	.229	.110	.371	.203
181	――は自分の住所がわかります（F）	.664	.233	.114	.509
182	――は他人ととてもうまくやって行けます（F）	.738	.022	.194	.584
183	――は自分が誰であるか（男か女か、何才かなどが）わかります（F）	.621	.308	.030	.471

No.	項　目	I	II	III	h^2
184	――は自分に向っていわれていることを理解するのが困難なので、いってきかすこともなかなかできません	.615	.131	.212	.441
185	――はたいてい何時も非常に不安がって過しています	.069	.205	.291	.131
186	――は注意を長時間集中することができません	.454	−.031	.313	.306
187	――は何時も元気なく沈みがちです	.121	.090	.203	.064
188	――はとても気安く近隣の人達に近づきます（F）	.304	−.112	−.034	.106
189	自信をもっているのが――の長所の一つです（F）	.473	−.103	.028	.236
190	自分の限界をわきまえているのが――の長所の一つです（F）	.419	−.103	−.100	.196
191	――のユーモアのセンスは私の楽しみの一つです（F）	.402	−.265	−.111	.244
192	――はたった今口にしたことも思い出すことができません（F）	.382	.226	.150	.220
193	――は自分のことをひとりの人間として話すことができます	.602	.134	.183	.414
194	――は見知らぬ場所では非常に緊張します	.056	.060	.356	.134
195	――とはよく話が通じます（F）	.482	.137	.028	.252
196	――は自分も一人前の人間だと思っています（F）	.651	.201	−.083	.471
197	――は行きたい所へ行くのにバスを利用できます（F）	.278	.282	.030	.158
198	他人には――の言おうとすることが理解できません	.560	.146	.262	.404
199	――は電話をよくかけます（F）	.410	.101	.038	.180
200	――は他人が自分に興味をしめすことを喜びます（F）	.093	.056	−.346	.132
201	――は悪夢にうなされることはめったにありません（F）	−.014	.068	−.197	.044
202	幸いなことに――はどうにか暮しています（F）	.246	.167	−.279	.167
203	――は非常にいらいらしています	.159	.095	.218	.082
204	――は人に向って自分の気持ちを表現できます（F）	.664	.039	.006	.443
205	他人への思いやりは――の長所の一つです（F）	.579	−.098	−.183	.379
206	――はいつも同じ順序でやりたがります	−.023	.101	.360	.140

表10　子どもの問題のバリマックス回転後の因子負荷量
（表9より共通性が0.15以下の項目を除く）

No. ＼因子	I	II	III	h^2
142	.313	.356	.323	.329
148	**.454**	.310	.325	.408
150	.067	**.648**	−.088	.432
151	.114	**.652**	.100	.449
152	.028	**.685**	.165	.498
153	−.058	**.725**	.001	.530
154	.073	**.623**	.283	.474
155	. 49	.070	.388	.177
157	.184	−.0007	.339	.149
165	−.036	−.050	.358	.132
168	.120	.183	**.606**	.416
169	−.100	.078	**.433**	.204
172	**−.704**	−.215	.006	.542
175	.215	.150	.373	.208
176	**.416**	.065	.314	.276
178	**.470**	.075	.360	.354
179	**.411**	.048	.127	.187
180	.119	.098	**.426**	.206
181	**.625**	.250	.277	.531
182	**.642**	.055	.390	.568
183	**.567**	.325	.238	.483
184	**.513**	.175	.392	.448
186	.350	−.014	**.424**	.303
189	**.463**	−.067	.098	.229
190	**.415**	−.036	.036	.174
191	**.404**	−.209	−.018	.207
192	.314	.213	.279	.222
193	**.525**	.155	.360	.430
195	**.459**	.143	.147	.253
196	**.709**	.253	−.019	.567
197	.227	.315	.131	.168
198	**.489**	.138	**.406**	.423
199	.351	.139	.175	.173
202	.279	.172	−.162	.134
204	**.635**	.087	.148	.433
205	**.590**	−.055	−.011	.351

33.4%，35.2%，38.8%であった。サンプルが障害をもった母親という比較的等質のサンプルであったこと，ケース数が少なかったことも寄与率の低さに関係していると考えられるが，Holroyd の質問項目が種々雑多な項目を含んでいるといえよう。

(III) 因子間の関係

1.　因子間の相関

236名のケースごとに各因子について因子得点を算出した。親の問題，家族の問題，子どもの問題のいずれかで，各下位カテゴリーの項目数の10%以上欠損値があり因子得点が算出できなかったケースは，精神薄弱が7名，視覚障害が1名，肢体不自由が1名の計9名であった。

227名の各因子における因子得点にもとづき，11因子

表11　各因子間の相関

因子		P1	P2	P3	P4	P5	F1	F2	F3	C1	C2	C3
精神的苦悩	(P1)											
悲観主義	(P2)	0.042										
過保護／依存	(P3)	0.062	0.037									
将来への不安	(P4)	0.107	0.066	0.039								
社会的孤立	(P5)	0.024	0.023	0.029	-0.049							
家族への負担	(F1)	0.484	0.475	0.203	0.462	0.026						
経済問題	(F2)	0.247	0.215	-0.104	0.203	0.032	0.126					
家族の和合の欠如	(F3)	0.018	0.188	0.254	-0.080	0.382	0.083	-0.009				
子どもの知的能力の障害	(C1)	0.078	0.259	0.489	0.097	0.216	0.312	-0.028	0.427			
子どもの身体能力の障害	(C2)	0.075	0.442	-0.005	0.236	-0.129	0.344	0.162	-0.021	0.037		
子どもへのケアーの必要	(C3)	0.461	0.068	0.382	0.543	-0.131	0.527	0.135	-0.053	0.093	0.062	

間の相関係数を求め表11に示した。親の問題（P１因子～P５因子），家族の問題（F１因子～F３因子），子どもの問題（C１因子～C３因子）の下位カテゴリーでの各因子間の相関はなく，３つの下位カテゴリーで抽出された因子は，独立の因子といえる。

親の精神的苦悩（P１）は，家族への負担（F１），子どものケアーの必要（C３）とかなり相関がある。親の悲観主義（P２）は，家族への負担（F１），子どもの身体能力の障害（C２）とかなり相関がある。親の過保護／依存（P３）は子どもの知的能力の障害（C１）とかなりの相関，子どものケアーの必要と低い相関がある。将来に対する不安(P４)は，家族への負担（F１，子どものケアーの必要（C３）とかなり相関がある。社会的孤立（P５）は，家族の和合の欠如（F３）と低い相関がある。また家族への負担（F１）は，先にのべた親の問題（P１，P２，P４）とのかなりの相関の他に，子どもへのケアー（C３）とかなり相関があり，子どもの知的能力の障害（C１），子どもの身体能力の障害(C２）と低い相関がある。家族の和合の欠如(F３）は，子どもの知的能力の障害（C１）とかなり相関がある。

2．子どもの問題での上位群，下位群

子どもの問題の知的能力の障害，身体能力の障害，子どものケアーの必要の３つの因子において，因子得点の高い群と低い群で，親の問題，家族の問題での評定にいかなる特徴があるかをみた。

子どもの問題の３つの因子で，それぞれ因子得点が上位にあるもの56名，下位にあるもの56名を選んだ。各因子について上位群，下位群の因子得点の平均値をｔ検定し，有意な差がある因子についてのみ表12ａ－ｃに示した。

母親が子どもの知的能力の障害が高いと評定している群は，悲観主義（P２），過保護／依存（P３），社会的孤立（P５），家族への負担（F１），家族の和合の欠如（F３）での因子得点の平均値が下位群より有意に高い。

身体能力障害で高く評定していた群は，悲観主義（P２），将来への不安（P４），家族への負担（F１），経済問題（F２）の因子得点が下位群より有意に高い。また社会的孤立（P５）では身体能力障害が高いと評定した群は低い群より，有意に低く評定していた。

子どものケアーの必要で高く評定した群は，精神的苦悩（P１），過保護／依存（P３），将来への不安（P４），家族への負担（F１）で下位群より，因子得点の平均値が有意に高かった。

3．経済問題での上位群，下位群

家族の問題の経済問題（F２）での因子得点の上位56名と下位56名で，他の因子の因子得点の平均値に違いがあるか否かみた（表12－ｄ）。

精神的苦悩（P１），悲観主義（P２），将来への不安

表12－ａ　子どもの知的能力の障害上位群下位群の各因子の因子得点

因子 ＼ 群		上位群 M	上位群 SD	下位群 M	下位群 SD	t (df=110)	P
悲観主義	(P2)	0.488	1.080	−0.053	0.755	3.08	P＜.01
過保護／依存	(P3)	0.575	0.824	−0.415	0.654	7.05	P＜.001
社会的孤立	(P5)	0.227	0.934	−0.395	0.669	4.06	P＜.001
家族への負担	(F1)	0.514	0.930	−0.155	0.778	4.13	P＜.001
家族の和合の欠如	(F3)	0.533	0.973	−0.408	0.368	6.78	P＜.001

表12－b　子どもの身体能力の障害上位群下位群の各因子の因子得点

因子＼群		上位群 M	上位群 SD	下位群 M	下位群 SD	t (df=110)	P
悲観主義	(P2)	0.591	1.104	−0.220	0.717	4.61	P<.001
将来への不安	(P4)	0.356	0.900	−0.228	0.873	3.50	P<.001
社会的孤立	(P5)	−0.143	0.935	0.236	0.654	−2.49	P<.05
家族への負担	(F1)	0.474	0.906	−0.291	0.709	4.98	P<.001
経済問題	(F2)	0.209	0.829	−0.121	0.843	2.09	P<.05

表12－c　子どものケアーの必要上位群下位群の各因子の因子得点

因子＼群		上位群 M	上位群 SD	下位群 M	下位群 SD	t (df=110)	P
精神的苦悩	(P1)	0.542	1.171	−0.377	0.459	5.47	P<.001
過保存／依存	(P3)	0.529	0.855	−0.301	0.600	5.95	P<.001
将来への不安	(P4)	0.552	0.714	−0.677	0.806	8.55	P<.001
家族への負担	(F1)	0.594	0.902	−0.434	0.483	7.53	P<.001

表12－d　経済問題の上位群下位群の各因子の因子得点

因子＼群		上位群 M	上位群 SD	下位群 M	下位群 SD	t (df=110)	P
精神的苦悩	(P1)	0.498	1.131	−0.103	0.860	3.17	P<.01
悲観主義	(P2)	0.300	1.008	−0.199	0.746	2.98	P<.01
過保護／依存	(P3)	−0.177	0.714	0.150	0.889	−2.15	P<.05
将来への不安	(P4)	0.325	0.905	−0.153	0.841	2.90	P<.01
家族への負担	(F1)	0.384	0.887	0.076	0.741	1.99	P<.05
子どもへのケアー必要	(C3)	0.293	0.853	−0.051	0.853	2.14	P<.05

（P4），家族への負担（F1），子どものケアーの必要（C3）で上位群は下位群より，有意に得点が高かった。また過保護／依存（P3）では，上位群は有意に得点が低かった。

因子間の相関係数，及び子どもの問題についての因子得点の上位群，下位群での他の因子の得点の平均値のt検定の結果から，次のことがあきらかである。子どもの知的能力の障害，身体能力の障害，ケアーの必要という子どもの問題が重いと母親が認識しているほど，家族への心理的，経済的負担が大きく，子どもに手がかかり，子どもの現状，将来を悲観し，母親は苦悩し，将来への不安を抱いているといえる。また子どもの知的能力の障害が重いほど，家族と子どもが一緒に活動する機会が少なく，子どもを含めた家族の和合が欠如しているといえる。

家族の問題での経済問題は，他の因子との間に相関はなかったが，上位群，下位群のt検定の結果から，経済的に困窮しているほど，母親の精神的苦悩，悲観，将来への不安が高く，家族への負担も大きいといえる。

(IV) 子ども側の要因と各因子の関係

1．子どものもつ障害

自閉症，視覚障害，肢体不自由，精神薄弱という子どものもつ障害が，親の問題，家族の問題，子どもの問題の各因子の得点にどのように影響しているかみた。障害別の各因子での因子得点の平均値を表13に示した。分散分析の結果，社会的孤立（P5），家族の和合の欠如（F3）以外の因子で，障害間に有意な差があった。

自閉症では，精神的苦悩（P1），過保護／依存（P3），子どもの知的能力の障害（C1），子どものケアーの必要（C3）で，すべての障害より有意に得点が高かった。また家族への負担（F1）は，肢体不自由との間に有意な差はなかったが，他の2つの障害にくらべ有意

表13　障害のちがいによる各因子の因子得点の平均値と有意差検定

因子 ＼ 障害	自閉症（N=28） M	自閉症（N=28） SD	視覚障害（N=32） M	視覚障害（N=32） SD	肢体不自由（N=66） M	肢体不自由（N=66） SD	精神薄弱（N=101） M	精神薄弱（N=101） SD	F (df=3/223)	グループ間有意差検定 自－視	自－肢	自－精	視－肢	視－精	肢－精
親の問題															
精神的苦悩（P1）	0.778	1.133	−0.097	0.980	−0.042	0.832	−0.132	0.763	8.471***	***	***	***			
悲観主義（P2）	−0.286	0.841	0.100	0.751	0.318	0.931	−0.139	0.829	5.182***		**				***
過保護（P3）	0.715	0.797	−0.200	0.798	−0.262	0.809	0.013	0.781	10.651***	***	***	***			*
将来への不安（P4）	−0.104	0.862	−0.376	0.640	0.260	0.987	−0.072	0.895	4.109**				***		*
社会的孤立（P5）	0.017	0.832	0.152	0.814	−0.061	0.842	−0.050	0.887	0.543						
家族の問題															
家族の負担（F1）	0.323	0.966	−0.136	0.871	0.158	0.810	−0.139	0.834	3.298*	*		*			*
経済問題（F2）	−0.399	0.942	−0.072	0.843	0.278	0.786	−0.044	0.795	4.943**		***	*	*		*
家族の和合の欠如（F3）	0.301	1.026	−0.032	0.837	−0.099	0.744	−0.052	0.712	1.857						
子どもの問題															
子どもの知的能力障害（C1）	0.823	1.027	−0.127	0.827	−0.375	0.828	0.045	0.842	13.024***	***	***	***			**
子どもの身体能力障害（C2）	−0.408	0.368	−0.166	0.659	0.637	1.202	−0.223	0.658	17.984***		***		***		***
子どもへのケアーの必要（C3）	0.498	0.914	−0.308	0.720	−0.179	0.769	0.052	0.886	5.904***	***	***	*		*	

* P＜.05　** P＜.01　*** P＜.001　　自－自閉症　視－視覚障害　肢－肢体不自由　精－精神薄弱

に得点が高かった。家族の和合の欠如（F３）は，他の障害との間に有意な差はないが，一番得点が高かった。自閉症では，最高得点を示す因子が６あり，障害間で一番多かった。

次に最高得点が多いのは肢体不自由である。悲観主義（P２）は，自閉症，精神薄弱より，有意に得点が高かった。将来への不安（P４）は，視覚障害，精薄より有意に得点が高かった。 経済問題（F２），子どもの身体能力の障害（C２）では有意に他の障害より因子得点が高かった。

精神薄弱は，肢体不自由にくらべ，過保護／依存（P３），子どもの知的能力の障害（C１） で有意に得点が高かった。また視覚障害にくらべ，子どものケアーの必要（C３）で自閉症にくらべ，経済問題（F２）で得点が有意に高かった。

視覚障害が他の障害にくらべ有意に高かった因子はなかった。

自閉症児の母親は，子どもの知的能力の障害が重く，子どもは自分で物事をせず，母親に依存しており，たえず子どもをケアーしていなければならないと感じている。そして家族と一緒に活動できる機会は少なく，家族への負担は大きく，母親の精神的苦悩は大きい。

肢体不自由児の母親は，子どもの身体能力の障害が重く，その障害は将来も続き，よくなることが期待できず悲観的になっている。経済的にも豊かでない。そして自分が面倒がみられなくなった時のことを心配している。肢体不自由児の手，足となっている母親の心理が表現されている。

2.　子どもの年令

子どもの年令により，各因子にちがいがあるか否かみた。小学校までの12才とそれ以上の年令にわけ，障害別に各因子の因子得点の平均値を求め t 検定した。視覚障害で， 子どもの知能の障害で， 低年令群 (N=8, $\bar{X}$=0.474, SD=0.692) が，高年令群(N=24, $\bar{X}$=−0.327, SD=0.781) より，有意に得点が高かった (t=2.58, df=30, P＜.05)。 他の障害では有意な差があった因子はなかった。

3.　子どもの性別

男子と女子にわけ，各障害において各因子の平均得点にちがいがあるか否かみた。

自閉症においては過保護／依存で，男児 (N=20, $\bar{X}$=0.990, SD=0.738) が女児 (N=8, $\bar{X}$=0.027, SD=0.465) より， 有意に得点が高かった (t=3.41, df=26, P＜.01)。社会的孤立で男児($\bar{X}$=0.264, SD=0.795) が女児 ($\bar{X}$=−0.598, SD=0.593) より有意に得点が高かった (t=2.76, df=26, P＜.01)。

肢体不自由においては，身体能力の障害で男児 (N=34, $\bar{X}$=1.063, SD=1.260) が女児 (N=32, $\bar{X}$=0.184,

表14　精神薄弱児の生活形態のちがいによる各因子の因子得点の平均値

因子 ＼ 生活形態		施設児(N=25) M	施設児(N=25) SD	在宅児(N=76) M	在宅児(N=76) SD	t (df=99)
親の問題						
精神的苦悩	(P1)	-0.082	0.873	-0.149	0.730	0.37
悲観主義	(P2)	0.486	1.157	-0.345	0.562	4.80***
過保護／依存	(P3)	0.242	0.816	-0.061	0.760	1.70
将来への不安	(P4)	0.539	0.809	-0.273	0.834	4.26***
社会的孤立	(P5)	-0.328	0.834	0.041	0.891	-1.83
家族の問題						
家族への負担	(F1)	0.543	0.961	-0.364	0.653	5.33***
経済問題	(F2)	0.217	0.761	-0.130	0.793	1.92
家族の和合の欠如	(F3)	-0.020	0.603	-0.062	0.749	0.26
子どもの問題						
子どもの知的能力の障害	(C1)	0.664	0.956	-0.158	0.696	4.65***
子どもの身体能力の障害	(C2)	0.301	0.913	-0.396	0.435	5.15***
子どもへのケアーの必要	(C3)	0.682	0.907	-0.155	0.780	4.47***

*** P<.001

SD=0.964) より有意に高かった (t=3.17, df=64, P<.01)。

精神薄弱において家族の和合の欠如で男児 (N=55, $\bar{X}$=0.078, SD=0.772) が女児 (N=46, $\bar{X}$=−0.208, SD=0.606) より有意に高かった (t=2.05, df=99, P<.05)。子どものケアーの必要で，女児 ($\bar{X}$=0.248, SD=0.895) が男児 ($\bar{X}$=−0.112, SD=0.853) より有意に得点が高かった (t=−2.07, df=99, P<.05)。

ここにあらわれた有意差のある因子では，精神薄弱児での子どものケアーの必要を除いて男児の方が得点が高く，男児をもつ母親の方が問題を多く訴えている。

4.　精神薄弱児での生活形態のちがい

精神薄弱児の中で25名の施設に収容され，養護学校に通学する子どもと，76名の自宅から特殊学級に通学する子どもについて，各因子の平均得点を求め表14に示した。

社会的孤立（P 5）以外，すべての因子で施設収容児の方が得点が高かった。有意差のあった因子は，悲観主義（P 2），将来への不安（P 4），家族への負担（P 1），子どもの知的能力の障害（C 1），子どもの身体能力の障害（C 2），子どものケアーの必要（C 3）であった。このことは，養護学校に通う子どもの方が，同じ精神薄弱でも重度の子どもたちであるということが関係していると思われる。

(V) 母親側の要因と各因子の関係

1.　母親の年令

母親の年令で，各因子の因子得点にちがいがあるかをみるために，ほぼ各障害の平均年令である40才をさかいに40才未満と40才以上の２群にわけ各因子の平均得点をくらべた。

自閉症では，過保護／依存（P 3）で40才未満の方が (N=17, $\bar{X}$=0.955, SD=0.711) 40才以上 (N=11, $\bar{X}$=0.342, SD=0.811) より有意に得点が高かった (t=2.11, df=26, P<.05)。また社会的孤立（P 5）で，40才未満の方が ($\bar{X}$=0.344, SD=0.849)，40才以上より ($\bar{X}$=−0.471, SD=0.534)，有意に得点が高かった(t=2.80, df=26, P<.01)。

視覚障害では，過保護／依存（P 3）で，40才未満の方が (N=12, $\bar{X}$=0.166, SD=0.812) 40才以上より (N=20, $\bar{X}$=−0.419, SD=0.724) 有意に得点が高く (t=2.12, df=30, P<.05)，子どもの知的能力障害でも40才未満は ($\bar{X}$=0.462, SD=0.947)。40才以上より ($\bar{X}$=−0.480, SD=0.497) 有意に得点が高かった (t=3.71, df=30, P<.001)。

精神薄弱では，悲観主義（P 2）で，40才以上の方が (N=54, $\bar{X}$=0.0302, SD=0.915) 40才未満より (N=46, $\bar{X}$=−0.313, SD=0.669) 有意に得点が高かった (t=−2.11, df=98, P<.05)。

精神薄弱の悲観主義をのぞいて，40才未満の母親の方が，ここで有意差のあった因子では問題を多く感じていた。

2.　母親のうけた教育年数

母親のうけた教育年数で，各因子の得点に違いがあるか否か，義務教育年数の９年をさかいに９年未満とそれ以上にわけて各因子の平均得点を比較した。

自閉症では，子どもの身体能力障害（C 2）で，９年未満 (N=5, $\bar{X}$=−0.094, SD=0.330) が，９年以上 (N=22, $\bar{X}$=−0.469, SD=0.351) より，有意に得点が高かった (t=2.18, df=25, P<.05)。

視覚障害では，家族への負担（F 1）で９年未満 (N=16, $\bar{X}$=0.164, SD=1.076) がそれ以上 (N=16, $\bar{X}$=−0.436, SD=0.466) より，有意に得点が高かった (t=2.05, df=30, P<.05)。

肢体不自由では，家族への負担（F 1）で，９年未満 (N=34, $\bar{X}$=0.359, SD=0.866) がそれ以上 (N=32, $\bar{X}$=−0.055, SD=0.700) より，子どものケアーの必要（C 3）で，９年未満 ($\bar{X}$=0.079, SD=0.647) が，それ以上 ($\bar{X}$=−0.454, SD=0.803) より，有意に得点が高かった (t=2.98, df=64, P<.01)。

ここで有意差のあった因子では，母親のうけた教育年数が９年未満の群は，それ以上の群より，問題を多く感じているといえる。

討　　論

Holroyd のQRS の検討から出発し，障害児をもつ母

親の問題，家族の問題，子どもの問題に及ぼす要因をみてきた。

Holroyd の QRS 作成過程はあらく，問題でのべたように尺度内の項目間の相関係数が .30以上のものをとってきている。我々が行ったような手法をとっていないので，我々が因子分析した結果，15尺度に明確にわかれてこないのは，当然といえば当然である。3カテゴリー別に行った因子分析で抽出された因子は Holroyd が設定した尺度の意味内容を含んでいる。QRS から我々の研究が出発しているので本研究に報告された因子が抽出されたが，新美（1979），橋本（1980）に報告されているような家族のストレスを測定するための尺度の項目を含めたら，またちがった因子が抽出されたであろう。

母親の問題，家族の問題，子どもの問題で抽出された因子で，各下位カテゴリーでは因子間に相関はなかったが，カテゴリー間の因子で相関があった。また，子どもの問題の知的能力の障害，身体能力の障害，子どものケアーの必要の因子得点の上位群，下位群での他の因子の平均得点の t 検定から，子どもの問題が大きいと母親が認識しているほど，家族への負担が大きく，子どもに手がかかり，子どもの現状，将来を悲観し，母親は苦悩し，将来への不安を抱いていることが示された。この結果は，子どもについての問題も母親自身が評定したものである。母親の評定とは独立に，子どもをよくしっている人（たとえば学校の担任）に子どもの知的，対人的，身体的側面の評価を行わせ，それと母親の問題，家族の問題をみていく必要がある。

障害児をもつ母親の養育態度については，Parental Attitudes Research Instrument(PARI) を用いた研究が行われているが(Dingman, Cook, Ricci, Paulsen)，障害児をもったことによる母親の衝撃を測定した研究は少ない。

Cummings（1966）は，精神薄弱，慢性の身体病，神経症の子どもと健康な母親を比較し，不安の感情が精神薄弱で一番高かったことを報告している。

Holroyd（1976）は，自閉症児，ダウン症児，外来通院児の母親を比較し，自閉症児の母親は子どもに対し混乱し，落胆し，子どもに注意し，子どもの依存を心配している。家族の他の成員への子どもの影響を心配し，家族の統合の欠如を訴えている。子どもについては，より身体的な能力の障害，活動性の欠如，将来の職業の制限を心配している。そして子供の人格上，行動上の多くの問題を心配していた。我々の結果でも，自閉症をもつ母親が11因子中6因子が最高得点であり，自閉症という子どもの問題の大きさ，母親の苦悩，家族のストレスの多大さは本研究の結果にもあらわれている。

橋本（1980）は，肢体不自由児をもつ家族と精神薄弱児をもつ家族の障害児出生によるストレスを，障害の診断時頃から，小学部入学前後時頃までの間について，アンケートにより遡及的に調査し，両者のストレスの大きさと，ストレスの大きさの時間的推移についてほとんど相違を示さないことを報告している。我々の測定しているものと，橋本の測定している内容は異っているが，我々の研究では，肢体不自由児をもつ母親の将来への不安，悲観，家族への心理的，経済的負担，経済問題，子どもの身体能力の障害で，精神薄弱より肢体不自由で有意に得点が高く，問題を訴えていた。調査した対象の年令のちがい，障害程度の違いが橋本の研究との相違の一因とも考えられる。

Kershner（1970）は，精神薄弱児を病院に入院させた家族と家で養育した家族を比較し，前者の家庭機能の改善を認めた。障害児を家庭から離すことにより，家族の心的負担が軽減すると考えている。我々の結果では，社会的孤立をのぞいて，すべての因子で，施設収容児の方が得点が高かった。子どもが養護学校隣接の施設に収容されたことにより，母親の問題，家族の心的，経済的負担は減少しない。社会的孤立の因子で施設児の方が在宅児より有意差はないが，得点が低いことは，施設児の親の方が同じ問題をもつ他の家族との連帯があることを示しているといえる。また一面で，子どもを施設に預けていることで，子どもについての他人の目を直接に気にしていないことをあらわしていると思われる。

母親の心的ストレスに及ぼす子ども側の要因として，子どもの障害の他に，性別，年令によるちがいをみた。障害により，有意差のあった因子はことなり，他の条件のコントロールがなされていないので一概にはいえないが，男児の方が子どもの問題が重く，扱いにくいと母親は感じている。

母親側の要因として，母親の年令，母親の教育年数についても他の要因のコントロールがなされていないので，子ども側の要因と同様であるが，年令が若い方が，また教育をうけた年数が短い方が，有意差のあった因子ではストレスを多く感じているといえるが，今後の検討が必要である。

親にとって子どもは自己の生命の延長であるといわれる。親は自己の身体と心にはひきつがれる価値があると信じ，子どもにより自己の生命が未来の世代へとのびると感じ，子どもが自己を幸福にしてくれることを望み，子どもに誇りをもっている。また親には子どもが2度目の機会となる。人には誰でも到達できなかった理想があり，親は子どもが自己の最高の資質を受けつぎ，自己に欠けているものを補充し，自己の夢をかなえてくれることを願っている。

子どもの障害に気づいた時点から親，家族には複雑で多様な心的ストレスが加重される。これは，橋本(1980)のいうように，時間的に変化していくものであろうし，

障害をもつ子どもや家族への介入や援助により軽減されていくであろう。

本研究のような質問紙法により障害児の親の心的ストレスをとらえることは，問題も多い。しかし，本研究の結果は障害児をもつ親の心理を理解し，苦悩，将来への不安，絶望，重荷的意識から，子どもの発達を促し新しい価値実現と，希望に生きる存在へと親が変容，成長していくのを援助する際の基礎的なデータを提供してくれたと思う。

要　　約

障害児をもつ親の心的ストレスを測定するためにHolroyd (1973) が開発した Questionnaire on Resources and Stress (QRS) についての項目分析を行った。

自閉症児の母親28名，視覚障害児の母親32名，肢体不自由児の母親66名，精神薄弱の母親108名の QRS を子どもの学校を通じて集めた。子どもの内訳は，4才6か月から12才11か月までが122名，13才から19才まで114名男子128名，女子108名であった。母親の年令は25才から39才11か月まで105名，40才から60才まで131名であった。母親のうけた教育年数は9年以下が116名，それ以上が118名であった（2名不明）。

親の問題，家族の問題，子どもの問題について15尺度，計206項目について，当該項目を除いた尺度得点と項目との相関係数を求めたが，.50以上の相関をもつ項目は17項目にすぎなかった。各尺度毎に主因子法により，因子分析したが，各尺度で第1因子への寄与率は12.7%～30.6%と低く，各尺度が単一因子で構成されているとはいいがたい。

次に我々のデータから3つの下位カテゴリー別に主因子法により因子分析し，親の問題5因子，家族の問題3因子，子どもの問題3因子抽出したが共通性の低い項目が多く，寄与率も低かった。そこで共通性0.15以下の項目を除き，同様に因子分析し，親の問題について精神的苦悩，悲観主義，過保護／依存，将来への不安，社会的孤立の5つの因子を抽出した。家族の問題について，家族への負担，経済問題，家族の和合の欠如の3つの因子を抽出した。子どもの問題について，知的能力の障害，身体能力の障害，子どものケアーの必要の3つの因子を抽出した。

抽出された11因子について個人の因子得点を算出し，11因子間の相関をみた。また子どもの問題についての因子得点の上位群，下位群で親の問題，家族の問題で違いがあるか否かみた。子どもの障害を重いと認知しているほど，親の問題，家族の問題での因子得点が高かった。

親の心的ストレスに及ぼす子ども側の要因として，子どものもつ障害のちがい―自閉症，精神薄弱，肢体不自由，視覚障害―をみた。自閉症児の母親，家族の心的ストレスが一番高く，次が肢体不自由児の母親であった。

精神薄弱児について施設収容児と在宅児の母親の心的ストレスとくらべると，施設収容児の方が高かった。

子ども側の要因として，子どもの年令，性別のちがいによる母親のストレスを比較した。子どもの年令について12才未満とそれ以上で殆ど違いはなかった。性別については障害により結果は異なっていたが，男子の方が，有意差のある因子では，得点が高かった。

母親側の要因として，母親の年令，母親のうけた教育年数によるちがいをみた。障害によりことなるが，有意差のある因子では，母親の年令が40才以下の方が，教育年数が9年以下の方が問題を高く訴えていた。

おわりに，本研究の調査に御協力下さいました松江市，出雲市，隠岐郡の小学校，中学校，養護学校の校長先生はじめ担任の先生，質問紙に御記入下さいました母親の皆様に厚く御礼申しあげます。

引　用　文　献

Cook, J. J. 1963 Dimensional Analysis of Child-Rearing Attitudes of Parents of Handicapped Children. *Amer. J. Ment. Deficiency*, **68**, 354–361.

Cummings, S. T., Bayley, H. C., & Rie, H. E. 1966 Effects of the Child's Deficiency on the Mother : A study of mothers of mentally retarded, chronically ill and neurotic children. *Amer. J. Orthopsychiatry*, **36**, 595–608.

Dingman, H. F., Eyman, M. A., & Windle, C. D. 1963 An Investigation of Some Child Rearing Attitudes of Mothers with Retarded Children. *Amer. J. Ment. Ment. Deficiency*, **67**, 899–908.

橋本厚生　1980　障害児をもつ家族のストレスに関する社会学的研究―肢体不自由児を持つ家族と精神薄弱児を持つ家族の比較を通して―，特殊教育学研究，**17**，22–33.

Holroyd, J. 1973 Manual for Questionnaire on Resources and Stress. Personal Communication.

Holroyd, J., & McArthur, D. 1976 Mental Retardation and Stress on the Parents. *Amer. J. Ment. Deficiency*, **80**, 431–436.

稲浪正充・西信高・小椋たみ子　1978　障害児の親の態度の調査（I）日本特殊教育学会第16回大会論文集，288–289.

稲浪正充・西信高・小椋たみ子　1979　障害児の親の態

度の調査（II）日本特殊教育学会第17回大会論文集，204－205.

稲浪正充・西信高・小椋たみ子 1980 障害児をもつ母親の心的ストレス 特殊教育学研究，**18**，33－41.

Kershner, J. R. 1970 Intellectual and Social Development in Relation to Family Functioning : A longitudinal comparison of home vs institutional effects. *Amer. J. Ment. Deficiency*, **75**, 276－284.

Kodaki, N., & Inanami, M. 1978 A Cross-Cultural Approach to the Parents' Attitudes and Feelings toward their Handicapped Children. *Bull. Shimane Med. Univer.*, **I**, 1－9.

新美明夫・植村勝彦 1979 心身障害児を持つ家族のクライシス状況の測定（II）発達障害研究所社会福祉学部研究，**4**，23－31.

Paulsen, M. J. 1977 Parent Attitudes Research Instrument (PARI) : Clinical vs. statistical inferences in understanding abusive mothers. *J. Clincal Psychol.*, **33**, 848－854.

Ricci, C. S. 1970 Analysis of Child-Rearing Attitudes of Mothers of Retarded, Emotionally Disturbed, and Normal Children. *Amer. J. Ment. Deficiency*, **74**, 756－761.